

宿に戻ると隣の部屋のドアが開いていて明かりが漏れていた。なんだ、他にも宿泊者がいたんじゃない。全く人気が無いように思われたのは宿泊者が出かけていたからの様で、いくつかの部屋の窓にもいつの間にか洗濯物などがかけてあった。

隣の部屋では若い女性が山から戻ってきたばかりの様子で、濡れた合羽などを干している。きっと亜丁に行っていたのに違いない。それなら亜丁の様子を聞いてみたいと思った。過去の記憶だけを頼りにやみくもに此処まで来てしまったが、現在の様子や高山ではオフシーズンに差し掛かっているこの時期に、宿泊施設など開いているのが不安だった。前回訪れた時には殆どの中国人観光客は亜丁の入り口で馬に乗り、景勝ポイントまで往復するだけで満足して日帰りしている様子だったが、三年間思い焦がれてやっと此処まで辿り着く事ができた私は、日帰りなんかじゃ到底満足できないのだ。夜間になれば真夏でも10度以下に気温が下がる亜丁に滞在する為、ダウンのシュラフやジャケット、ズボンまで背負って持ってきていた。最悪泊まる場所が無ければ「野宿してやる!」くらいの意気込みはあったが、できればそれは避けたいものだ。

「你好!! 亜丁に行ってきたの?」

「そうよ、さっき戻ったばかりなの。友達は食事に行っているけど、私は疲れちゃったから先に帰ってきたのよ。」

彼女は上海から来ている旅行者だそうで、感じ良く会話に応じてくれた。私が懸念していた宿泊施設も、彼女の話ではどうやら泊まれる場所があるらしい。彼女が携帯電話で撮った写真を取り出して見せてくれた。

「とーっても綺麗な湖があるの」

ああ! それはまさしく三年前に私が見た宝石の湖だった。

あまりに何度も思い描き人に語るうち、私の心の中でどんどん美化され幻の様に思っていた湖だ。今回これほど亜丁にこだわり再訪を願ったのは、その幻の湖の存在をもう一度確かめたかったというのが一番の理由だった。それが自分の足で訪れる前に、あっさり携帯電話の画面で確認できてしまったというのは、私が思い描いていたドラマチックな展開とは非常に異なっていたのだが、やはり湖はそこにあったのだ。そんな私の胸中を知る由もない彼女は「亜丁の宿の食事はとっても高くて不味いのよ!」と顔をしかめてみせた。



翌日目が覚めると先ずシャワーを浴びた。亜丁には何日かいるつもりだったので、次に稲城に戻るまで当分の間身体を洗う事ができなくなってしまう。これが当面の洗い収めとばかりに時間をかけて髪も身体もゴシゴシ洗った。

昨日まとめておいた不要な荷物は青年旅舎の事務所に持って行き預かってくれるように頼むと、例の女の人が部屋の隅をアゴで指した。どこまでも感じ悪い宿だ。もう二度と泊

まらないぞ~!

日なたをブラブラしながら洗った髪を乾かし、タクシードライバーのお兄ちゃんを待ったが、約束の8時になっても現れない。このような土地では時間に正確な方がめずらしい事なので気楽に待っていたが、昨日約束した私の言い値があまりに安いように思えたのが、ちょっと不安だった。あれで私以外の乗客が見つからなければ赤字だろうし、もっと良い客が見つかったりしたら彼はあっさり予定を変更するだろう。

8時半をまわり、やっぱりすっぽかされたかなあ~と思われ始めた頃、旅舎の敷地に見覚えのある車が乗り込んできてドライバーのお兄ちゃんともう一人の男が降りてきた。

「待ってたよ~!! もう来ないかと思っちゃった!!」

笑顔で駆け寄る私に、お兄ちゃんは何だかバツが悪そうにモジモジしていてどうも様子を変だ。案の定、口ごもりながら「今日は行かないんだ」と言い出した。

「はあ!」

喜んだ後の落胆の大きさと、とたんに私の目も吊り上がる。

「昨日何度も約束したでしょ!? 何で今さらそんな事言うのよ!!」

申し訳なさそうに誤るお兄ちゃんを陰しい口調で問い詰めるが要領を得ず、それを見かねた様に彼の代弁をする連れの男の言葉を何度も聞き返すうちに、今日は警察が怖いから行かないんだと言っているらしいのが判った。

「はあ~!! 警察!? 警察なんて関係ないでしょう!」

どうせ他のお客が見つからなくて、赤字だから走りたくないっていうのが本当のところには違いない。私の剣幕に恐れ入ってモジモジしているお兄ちゃんと連れの男は苦し紛れに「あの人達の車で一緒に行けばいい! 俺が交渉してあげるから!」と、ちょうどその場で出発しようとしていた、マイカーで来ている中国人の宿泊客をつかまえると

「なあ、亜丁に行くんだろ? ついでに彼女も一緒に連れて行ってやってくれよ」

と頼み始めた。たまたまその場にいただけで何の関係も無い中国人旅行者は、あからさまな迷惑顔で「車の定員がいっぱいだから乗せられない」と答えている。

「詰めれば一人くらい大丈夫じゃないか! 乗せてあげたっていいだろう~!」

「いや、これ以上乗れないよ」

「ケチな事言うなよ、女一人くらい乗せられるさ」

「無理だって言ってるじゃないか! 定員なんだよ!」

いきなり見知らぬ女を乗せると田舎のタクシードライバーにからまれてしまった気の毒な中国人も彼らのしつこさに語気を荒げ、私を置き去りにしたままその場で押し問答が始まってしまった。何なんだ、この展開は。

「ちょっと待ってよ~!! 私はその事頼んでないでしょう

!?勝手に交渉するな〜!!

「だって垂丁に行きたいんだろ!？」

「見知らぬ他人に迷惑かけてまで行きたくないわよ!」

「迷惑だとは言っていないだろ!満席なんだから仕方ないじゃないか!」

それぞれが大声で自分の主張をはじめ、三つ巴の口論が始まってしまったところで、なんだか可笑しくなってしまった私はそれまでの怒りが急速に萎んでしまった。

理由はどうあれ、ちゃんと私に断りを入れるために此処までやってきただけでもお兄ちゃんはまだ誠意がある方だろう。今まで旅してきたアジアの国々で、このような約束を何の連絡も無くすっぽかされた事は何度もあるし、たぶん私に申し訳なくて一人ではやって来れずに仲間まで連れて謝りにきたのかと思うとちょっと可愛くもあって憎めなかった。それより何より彼には昨夜夕食を奢ってもらっているという弱みもある。

「もういいよ。今日は稲城で遊ぶことにするから」

ついムキになってしまったのだが、考えてみれば別に急いでいる旅ではないのだし、本来なら今日は成都に戻るバスに乗るため、自分が断りを入れなければならなかったかもしれないのだ。あまりでかい顔して彼らを責めるのも考え物なのだ。

マイカー旅行者達は「乗せてあげられなくて悪かったな!本当に定員いっぱいなんだ」と言い訳(?)しながら出発し、タクシードライバー達も「ごめんね。他の車を探してよ」と謝りながら帰っていった。一人取り残された私は何だか力が抜けてしまった。昨夜からの事を考えるとまったくジェットコースターに乗っているような浮き沈みだ。これから今日一日をどう過ごすか…とりあえず朝ごはんでも食べに行くか。旅舎を出て街の中心に向かって歩いているうちにだんだん楽しい気持ちが戻ってきた。そんなに急いで垂丁に行く事にこだわらなくても良かったじゃないか。この稲城の街だって目的地の一部だったのだ。昨夜は既に暗く店も閉まっていたので、まだ街の様子は殆ど見ていなかった。



何を食べようかな…ブラブラ歩いてみるが、この辺りの土地にどんな食べ物があるのか良く判らない。一人だと結局、麺か餃子くらいしか思いつかなくて、再び道の脇にあった小さな餃子のお店に入ってしまった。さすがに三度つづけて水餃子では芸がないと思い、店員のお姉さんに「焼き餃子はできる?」と聞いてみたのが通じているのかいないのか、忙しそうなお姉さんは他の客ともやり取りしながら「はいはい、餃子ね」と答えただけだ。念を押すためもう一度「注文は焼き餃子だよ!」と大声で言ってみたが、私の不明瞭な中国語が聞きとれなかったのか、彼女は返事をせずに奥に入ってしまった。

宙に浮いてしまった自分の言葉を照れくさく思ったその時、「お姉さん!!彼女の注文は焼き餃子だよー!!」店の奥に向かって大声で叫ぶ声があった。隣に座っていたカップルの

男性だ。目を上げると二人がニコニコしながら私を見つめていた。

「ありがとう」

「君は何処の人?」

「日本人」

「そうか!少し中国語が話せるんだね。俺たちも旅行者さ。香港から来たんだ」

どうりで二人の様子はどこか垢抜けていた。二人ともフレンドリーで親切そうだ。無事に「焼き」で運ばれてきた餃子は望んでいた物だけあって美味しかった。

店の通路を挟んで少し離れた隣のテーブルのカップルとポツポツ話しながら餃子を食べていると突然一人の男が外から入ってきて香港カップルに向かって話し始めた。聞こえてくる会話の内容はタクシーの料金交渉のようだ。私はハッとすると思わず叫んだ。

「あなた達、どこに行くの!？」

カップルの二人もハッと似たような顔で私を見返す。

「君は何処に行くんだい!？」

「垂丁に行きたいの!でも一人だから、一緒に車をシェアできる仲間を探したいのよ!」

「俺たちも仲間をさがしてたんだ!!よーし!君もこっちのテーブルに座れよ!一緒に行こう!これから俺たちは仲間だ」

「やった〜!!」

私は声をあげて喜びながら、内心でも万歳していた。やった!やった!やったー!!こんなひよんな事から新しい仲間が見つかるなんて!タクシーのお兄ちゃんと別れてからまだ1時間もたっていない。勿論一人で垂丁に向かうより、仲間と一緒にいける方が楽しいに決まってる!!こうなると、朝、垂丁に行けなかったのもまた神様の思召しかと思えてくる。さっきまで失速していた私の気持ちがまた速度を上げてグーッと上向いてきた。何が起こるか判らない一人旅の気分は下がったり上がったり、まさにジェットコースターだ。

香港カップルの二人も盛り上がりしてきたようだった。彼の方が立ち上がると「よーし!君は彼女とここで待っていてくれ!俺は今からもう一人誰か仲間を見つけてくるよ!!人数がそろったら今日出発しよう!」と外に走り出て行った。

彼女の話ではこちらのタクシーも垂丁までの車代はやはり200元という事だ。2人だと高いので、4、5人のグループで垂丁まで行きたいと仲間を探していたのだそうだ。稲城には垂丁目当ての旅行者が大勢いるので仲間を探すのはそれ程難しくない筈との言葉どおり、程なくして彼が一人の中国人女性を連れて戻ってきた。

「さあ、これから俺たちは一緒に垂丁に行く仲間だ。改めて自己紹介しよう。俺は阿龍、彼女は小青。香港から来たのさ」  
アロンはなかなか頼りになりそうな好青年だった。

「私は元子日本人よ」

「私はウィン。江西省から来たの」

宜しく!と4人で手を重ねて握手しあった。なんだかとても楽しくなりそうだ。

(続く)